

別記様式（第5条関係）

会 議 録

会議の名称	第15回福津市共働推進会議
開催日時	令和6年3月22日（金）午後6時00分から午後8時00分まで
開催場所	福津市役所 別館1階大ホール
委員名	（1）出席委員 嶋田 暁文、依田 浩敏、奥 弘子、小林 真理、富松 享一、中川 孝晃、山口 覚、山田 雄三 （2）欠席委員 三ッ橋 美津子
所管課職員職氏名	市民共働部長 香田 知樹 市民共働部地域コミュニティ課長 石井 啓雅 地域コミュニティ課市民共働推進係長 井上 真智子 地域コミュニティ課郷づくり支援係長 向井 恭子 地域コミュニティ課郷づくり支援係 折居 鈴香
議 題 (内 容)	・ 答申 ・ 市長との対話
	公開・非公開の別 <input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開
	非公開の理由
	傍聴者の数 8人
	資料の名称 ・ 次第 ・ 福津市共働推進会議 答申書 ・ 福津市共働推進会議 答申書別添資料
会議録の作成方針	<input type="checkbox"/> 録音テープを使用した全文記録
	<input checked="" type="checkbox"/> 録音テープを使用した要点記録
	<input type="checkbox"/> 要点記録
	記録内容の確認方法 委員による確認
その他の必要事項	

審議内容（発言者、発言内容、審議経過、結論等）

1. 会長あいさつ

2. 答申

会長から市長へ、答申書の受渡しを行った。

市長

会長をはじめ審議会委員の皆様におかれましては、令和4年6月から約2年間、計15回にわたり熱心にご議論のうえ、答申書の作成にご尽力いただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。

答申書に込められた思いとともに、審議を通じて提案された貴重な方策案等を真摯に受け止め、今後、郷づくり推進事業の改善等に取り組んで参りたいと思う。

3. 市長との対話

会長

委員から2年間の審議を通じての感想や思いなどを述べさせていただく。

副会長

メッセージでも書いたように、「まちづくりは人づくりから」と言われており、今回地域の皆様の活動を見させていただき、皆さん非常に活発に活動されていることや、横のつながりを大切にしながら活動されているというのが非常に印象的であった。今回郷づくりに関して色々と勉強させていただいたが、福津市の地域特性をうまく生かしながら郷づくりを進めていくと、さらに住民の方たちは動きやすくなるのではないかという風を感じた。

委員

私たちが机上で色々と考えるのではなく、「まずは現場の声を聞かなければいけないだろう」ということから、8つの郷づくりを回って色々な話を聞いたというのがスタートラインだった。その際、現場の皆さんの切実な思いが伝わった。また、「継続するためにはこれが必要である」という声は、私たちから見ても非常に合理的な意見であると思った。

福津市の特徴というのは、「自分たちでこういうことをやってみたい」「やってみる」といった市民力が非常にあるところだ。しかし、「権限を委譲するので郷づくりで自由にやってください」と言いながら、やってはいけない制約のようなものが非常に多い。その苦しみというものを非常に感じ取れたような気がする。

特に、余剰金の繰越しの話や時給の話で、能力のある人を雇うというようなことも今は自分たちで出来ない。あるいは、「収益事業をやりながら、自分たちで使えるお金を増やしていきたい」という思いがある方がたくさんいたが制約があってできない。その辺りが、今回の答申を機に改善されると、皆さんのモチベーション向上や新しい担い手につながるのではないかと思った。

委員

全郷づくりを回ってヒアリングをできたことが一番良かった。全国的に、超高齢化や少子化が進んでいるという大変な状況にあり、次の担い手もなかなか見つけることが出来ないという課題が山積の中で、地域ごとに本当に創意工夫しながら、住民のための地域づくりが行われているというところを改めて確認できた。

一方で、2つのメッセージがあると思う。行政は「行政と住民のパートナーシップでこれからやっていきますよ」という住民自治を前面に出しながら、一方で、行政側が制約を作って、本当の住民自治を阻害してしまうような仕組みや取組が行われている。「住民自治を推進しなさいと言っても、やっぱり行政の出先機関みたいな役割でしょ」といった、少し諦めのような声もあった。この裏と表の2つのメッセージをどう解消していくのか、福津市の次の時代の住民自治をどう作っていくのかというところが、一番の課題であり取り組むべきことであるなど感じた。この答申がその動きにつながることを願っている。

委員

私は、地域の代表として共働推進会議に参加させていただいた。8つの郷づくりを訪問させていただき、同じように地域の課題に一生懸命取り組んでおられるが、地域ごとにやり方に違いがあることが分かった。一方で、交流センターの利用の問題や交付金の使途の問題、余剰金返還の問題等は、ほとんどの郷づくりで共通している課題なのだと感じた。

今答申書は、審議会から市にボールを投げた形であるが、最後は私たち郷づくりにボールが投げられる。まずは市が早急かつ真剣に、この答申書の課題を解決していただき、ひいては私たちのほうも真剣に考えていく課題であると思っている。

委員

私は20年ぶりに生まれ育った福津に帰ってきたが、福津中を回って話を伺ったことで、改めて、地域の特徴や郷づくりの方々の熱意に触れることが出来たことが良かった。

どの郷づくりでも「若い人が参加してくれない」「次の担い手が育ってない」ということが共通の課題としてある。一方で、現役世代という捉え方をすると、私が今回公募委員で申し込んだように、若くて仕事や共働きで時間がないが「地域のために何かしたい」とか、「子供たちのために何かしたい」「ちょっと自分こんなのやってみようかな」という気持ちを持った人は、意外といると感じる。そこが上手く地域とつながっていくことが出来たら良いと思っている。

もちろんそれは市の取組だけでは駄目で、郷づくりでというのもなかなか難しいテーマでもある。その部分の連携が上手く取れていき、私も含めてさらに草の根の活動に取り組み、つながるきっかけを広げていきたいと感じた。今回の答申が、そこに向けての後押しやつながるきっかけの1つになればと思っている。

委員

8つの郷づくりには地域性があり、各郷づくりで色々な問題を抱えている、そして共通の問題もあるということを改めて認識できたことはとても勉強になった。

この答申が出た後は、市にはスピード感を持って検討や対応をしていただきたい。この答申は、私たちも各郷づくりで見ながら色々と協議し、今後の郷づくりを進めていきたいと思っている。

委員

2年間委員として活動をし、とても勉強させていただいた。津屋崎にヒアリングに来ていただいた際に、なかなか激しい意見が多く、皆さん驚かれたのではないかと思うが、本当に郷づくりの皆さんは良い方ばかりで、私はとても郷づくりが好きである。もっと皆さんに郷づくりを知ってもらい、地域の皆さんと一緒に活動したいと思い頑張っているが、思うようにいかない。

郷づくりの皆さんは本当に頑張っておられ、地域の皆さんも少しずつではあるが協力していただけている。地域の方に、もっと郷づくりを知ってもらい、参加していただき、より一層郷づくりを楽しいものにしていきたいと思う。今回の答申で、少しずつ現状が変わっていくことをとても期待している。

会長

やはり重要だったのは、8つの郷づくりを回らせていただいたことと、令和5年7月にワークショップを開催し、直接色々なご意見を伺えたことである。その内容もかなり答申の中に含めており、現場の声を重視した、地域に寄り添った答申になっていると私自身確信している。

一連のプロセスを通じて私が1番感じたことは、可能性を感じたと同時に、もったいないということだ。もったいないという部分を今回の答申で書かせていただいたが、方向性としては3つあると思う。

1つ目は、制約をなくすということ。これまで市は、自由にやってくださいと言いながら、制約をしている部分が多い。まずは、色々な制約をなくしていただく必要があるだろう。具体的には、答申内に書かせていただいているためご覧いただければと思う。

2つ目は、寄り添うということ。市は、自治だからといって地域を突き放している部分がある。例えば、高齢化一つとっても、これまで中心的にやってこられた方々が高齢化でリタイアされるというケースはたくさんあり、その成熟度に応じて支援する内容も変わってくるはずだ。今回、事業的な活動はやって良いのではないかという答申をさせていただいているが、例えば、何か事業をやっていく時に、会計的な部分が分からないという場合はその支援をしていかなければいけない。成熟度に応じて寄り添い続けることが必要であり、突き放して独り立ちしなさいと言って、何も手を貸さないということとはあり得ないと思う。

3つ目は、第三者を使うということ。当然のことながら、行政も資源が限られており、必ずしも職員がコミュニティ関係に詳しいわけではない。その

中で、1つは未来共創センターとの連携、もう1つは、引き続きこういった審議会の場の設置が必要だろう。様々な要望事項等を審議会に寄せてもらい、それを審議会が代弁していくような在り方が良いのではないかと。また、代表者会議の場が「どうしても地域から不満が出てきて、対話の場になりきれていない」と伺っている。それについては、不満を出す場が他にあれば、代表者会議が対話の場になり得るかもしれない。そういった工夫が十分出来ていなかった結果、負荷がかかってしまっているのではないかと。

8つの郷づくりにヒアリングに行かせていただき、郷づくりの皆さんの活動に感銘を受けた。同時に、発想を変えていただく必要がある部分も、まだまだあるのではないかと考えた。「若者はなかなか事業に関心を持ってくれない」と言われているが、それは「今地域がやっていることをやってくれ」という形で若者を集めようとしているからである。自分たちを前提とした上で、相手に関わってくれというのはなかなか難しい。

むしろ、地域に関心を持って頑張っている人や団体は、既に地域にたくさんいるはずだ。そこに自分たちが出かけて行き、つながっていくというような活動や、そういう人たちがやりたいことを応援してあげるようなスタンスで関わっていくような在り方を模索していただきたいと思う。

最近、地域づくりをしていくためには、「したいこと」「できること」「社会的に意味があること」の3つを重ね合わせていくことが大事だと語られている。特に、一個人が「したい」「できる」ことをどれだけ大切にしていられるかということが大事とされている。何かやりたいと思っている若者たちに、自分たちが出向いて「一緒にやろうよ」とできるかどうか大事である。

若者に限らず、「一度地域に関わると、引きこまれて抜け出せなくなるのではないかと」という感覚がある。熱心にされているからこそ、そのパワフルさに自分とはとてもついていけないという感覚を持ってしまうところがあると思う。それならば、関われる部分だけ関わってもらうという仕組みを作ってはどうか。例えば、「スマホを教えるだけで良いよ」「これだけ関わってもらえたらいいよ」という形で、限定的な関わりしろを作ることで、安心感を持って関わってもらえるのではないかと。

どうしても「自分たちが大変だから、早めに新しい方に入ってきてもらい代わってほしい」という考えになりがちだが、大変なことに関わっていきたいとはなかなかならない。「楽しくやっていく」とことと「限定的な関わりしろ」ということを意識してやっていただくと良いのではないかと。

また、今回の答申には限界がかなりある。例えば、9ページに書いてある交付金の配分の部分で、現状1人あたりの地域格差が大きいという指摘をいただいた経緯があり、答申に書かせていただいていた。しかし、全体の総額が一定であるという前提の場合、どこかの額を上げるためには、他のどこかの額を下げなければいけない。それを行政ができるかという点で難しい。そのため、地域の皆様にぜひお願いしたいのは、やはり最後は地域同士で話し合ってもらいたいということだ。意見を出し合い、より良い案を見出していかなければ打破できない問題だろう。

今回の答申には、行政が変えていかなければいけないことを色々と書かせていただいたが、最終的には、地域が自分たちで話し合うことが必要である

う。地域同士の意見や理解が異なる中で対話をするということはとても大変なことであるが、そこさえできれば打破できることはたくさんある。その辺りは、後のステップとして考えていただきたいと思う。

26 ページに記載している通り、本日審議会から市へ答申というボールを渡し、これを市ができる限り取り組み、最終的には地域の方々にボールが渡るといふ流れになる。もちろん今回で全てが解決できるわけではないが、改善は引き続き取り組んでいただきたいと考えている。まずは、今回の答申の内容をしっかりと取り組んでいただければと思う。

市長

副会長からは郷づくりの持つ可能性や期待の言葉をいただいた。

委員からは、8つの郷づくりを回って、地域の方から極めて合理的な意見を伺ったという感想をいただいた。

委員からは、住民自治と言いながら、一方で色々と制約をしているところがあるという問題点を指摘していただいた。

委員と委員からは、この答申書に載せていることが、我々の思いであり願いであるため、できることから早急に取り組んでいただき、市からボールを投げ返してほしいという思いを受け取った。

委員からは、キッカケラボに関わられていた経験もあり、つながりという部分の大切さが伝わった。

委員からは、郷づくりの役員の皆様は苦勞されながらも、情熱をもって頑張っておられ、地域視察の声は地域の切実な思いであるということが伝わった。

会長からは、「福津市には可能性がある。一方で、もったいない」という言葉をいただき、それについて3つの方向性を述べていただいた。1つ目に、制約をなくすということ。2つ目に、成熟度に応じて寄り添うということ。3つ目に第三者を使うということだ。3つ目の第三者の1つとして、会長も言われていたように、この審議会のような機関を継続していけたら良いと思う。

また、市の財源は総額が決まっている中で、人口増加に伴い、総額をもう少し上げる可能性はあっても良いと思うが、厳密性を高めなければいけない部分もあるため、全地域が納得のいく交付金の配分をすることはなかなか難しい問題である。そういう点も、会長から地域への投げかけということによっていただいたように感じた。

諮問1の答申書の別添資料では、5つの柱を設定して現状分析とともに方策案を提案いただいた。中でも特に早期に取り組むべきと思われる事項はどれだと思われるか。

副会長

柱2の拠点のあり方だと思う。拠点をいかに使いやすくするか、あるいは利用しやすくするかということが大切であろう。

予算やお金というのは、人が動いて活動していることに対し付いてくるものだと思う。であるため、まずは人が集まってくるような居心地の良い場を創出することが大事なのではないか。

委員

柱1の交付金のあり方だと思う。やはり、余剰金の返還や収益事業の点など、制約が多いと思う。

地域からの声は「これについては、こう改善するとより良くなる」といった具体的な声が多かった。しかし、それに対する市からの返答は非常に抽象的であり、「結局あの話はどこにいったの」というやり取りが続いている。このやり取りに、地域はとても不満を持っているのではないかと思う。具体的な問いに対しては、具体的に返していただくということが大事であろう。

委員

委員が言われた「具体的な問いには具体的に返す」という意見に賛同する。

優先的なものを1つ挙げるとすると、住民と市の関係性をどう結び直すか、対話の場をどう設定するかというところだと思う。郷づくりの方の意見をしっかりと聞いた上で、単に対話するのではなく、妥当性の高いものはしっかりと実現していくという仕組みづくりが重要であると思う。さらに言えば、5つの柱の土台として、次の時代の新しい住民自治を作っていくのだという福津市の姿勢や本気度がなければ、対話の場を設けても、郷づくりの皆さんも「一緒に作っていこう」という姿勢にはならないのではないか。福津市として、どこまで本気度を示すのかというところが、根っこにあるのではないかと思う。

委員

優先度が高いと感じるのは、人の循環についてである。

15年前に地域づくり計画を作った時の写真を見ると、今も郷づくりの役員をしている方がかなり写っておられた。その方たちは一生懸命活動していただいているが、郷づくりが持続可能な組織になるには、新しい人が入ってこない、本当にあと数年後には、今の頑張っておられる方々が活動していくのは現実的に難しくなる。

会長も言われていたが、どうしても郷づくりの中では「自分たちがやっていることに、若い方が入ってきて手伝ってほしい」という感覚の方が非常に多い。そうではなく、自由に使える予算枠を設けて、その範囲で「自分たちが自由に提案して、やりたいことをやって良いよ」というようなことをしない限り、若い方はあまり魅力を感じないのかもしれない。「地域でこういうことをやってみたい」と思っている若い方を応援するという発想が大事であろう。

委員

昨年、ありがたいことに委員から「じんとう祭の1ブースを好きに使って良いので、子供たちと何かやってほしい」というお題をいただき、子供たちと一緒にブースを出した。その結果、じんとう祭の後も「この話は委員に相談してみよう」「委員とこの人をつないでみよう」というような、「郷づくりに関わったことをきっかけに、別のつながりが生まれる」といった動きが

実際に起こった。任せる側からすると、不安や心配ごと、気になることが色々あると思うが、思い切ってつなげていただいたのはありがたかった。

柱の優先度としては、柱4の市の関わり方だと思う。各郷づくりを回った時に感じたのは「本当はお互い目指しているところは同じなのに、すれ違っているところがある」ということだ。同時に、それを両者だけで何とかしようとするのはなかなか難しいだろうとも感じた。そのため、先ほども言われたように、第三者が適切に関わるといったアプローチがあったほうが、お互い率直に話せるのではないか。やはり、市からは言いづらいこともあると思うため、今までとは違うアプローチをするために、郷づくりに対する市のフォローのあり方としても第三者が関わるということが大事になるのではないか。

委員

神興郷づくりは、市の中でも2番目に高齢化率が高いところである。実際、自治会を運営することが難しい状況になっている自治会がたくさんある。郷づくりを運営していく上でも高齢化は問題になっており、今後の運営や郷づくりに関わる人たちのためにも、研修のようなものを市が主催してほしい。「自分たちの地域は自分たちの手で」と言われても、地域自治について学ぶ場がないと難しい。今後のためにも、そういった研修の場を設けていただき、そこに若い方も参加できるような体制を作っていただきたい。

委員

柱2の拠点のあり方だと思う。津屋崎郷づくりは、拠点を転々としてきたため、「何でこんなに変わらないといけないのか」という反発がかなりある。また、令和6年4月からは交流センターになるが、「中に入りづらい」という声がとても多い。市役所の方が仕事をされている横を通過して中に入るため、郷づくりの利用者の皆さんは、とても気を使われている。

私は福祉部会もやっており、会議室で色々な行事を行っている。歌を歌ったり楽器の演奏をしたりするが、大きな音を出さないようにとても気を使っている。利用者の方は、本当はカラオケで大きな声で歌いたいと思っても歌えないという状況である。

会長

皆さん色々と挙げていただいたため、敢えて申し上げると自治会の部分ではないか。よくあるのは、高齢化で自治会活動が難しくなってきたため、協議会がそこをカバーするという建付けだったものが、実際には自治会と同じようなことを協議会が行っていることでやるが増えてしまい、逆に持続可能性を低くしてしまっているということだ。従来のやり方ではない在り方、例えば、どういった行事をしているのか、どんな会議があるのか、どんな仕事があるのかというのを棚卸し、場合によっては廃止・統合する、限定的に関われることを増やすという形で、まずは地域の負担を軽減していただくということが大事である。

今も「色々やりたいことはあるが、忙しいからできない」のではないかなと思う。とすると、第三者が関わり、業務の見直し作業の手伝いや負担軽減

策の提案をして、まずは地域の負担を軽減していくということが大切である。

併せて、交付金のルールを簡単にさせていただくということも必要であろう。公開性を高め、信頼を確保していけば良いと私は思う。例えば、3,000円の弁当を購入し、その内容を地域に公開して「高過ぎるだろう」という声が上がったとしても、「これはこういう理由で3,000円にした」と説明して地域の方が納得したならばそれで良いはずだ。逆に、納得させられなければ、改善していけば良い。それが地域自治というものだ。

地域自治とは、色々と試行錯誤しながらやっていくものであり、細かくルールを決めてしまうと、身動きが取れず細かな事務も発生する。行政からの負担を軽減するということと、現在地域で行っている業務について見直しを図れるようにバックアップしていただくということが必要であろう。

市長

現状、郷づくりや自治会の役割、お互いのすみ分けが不明確になっていたりと、事務負担が増えていたりする状態であるため、そういった点を整理する必要があると思う。

交付金のあり方にしても拠点のあり方にしても、やはり制約が多いという声が多かったように思う。その点については、制約を減らす分、地域に透明性を高めていってもらいたいという流れが大事であると思った。

委員から、行政の本気度が問われているという言葉をいただき、郷づくり制度が始まった当初、どのような姿を目指していたのか改めて振り返ることも重要だと思った。

会長や委員からは、自治会のことについても触れていただいた。本日いただいた答申書の中に「条例の見直しは不要であるが、別途郷づくり推進に特化した条例の制定が必要である」と書いてあるように、自治会の定義づけや役割、市との関係性という位置づけも重要であると思った。

委員が言われていた、津屋崎郷づくりの拠点については、津屋崎が抱えておられる切実な問題であると認識させていただいた。津屋崎は福間エリアに比べて自治公民館が少ないエリアでもあり、高齢の方が思い切り活動に取り組むことができる場所がない不便さを感じるが、今ある拠点の中で、制約をもう少し緩めることで何とか改善していけないかという思いである。

本日答申を受けて、今後、市がどういう動きをしていくかということが重要であると思う。諮問1の答申書の別添資料では、方策案を着実に実行に移すため、実行プランの策定とともに進捗状況をチェック・管理する第三者機関の設置を提案いただいた。第三者機関としてはこの共働推進会議が適当だと思うが、進捗状況のチェック・管理の他に今後どのような役割が求められると思われるか、会長の考えを伺いたい。

会長

大きく分けて2点あると思う。1点目は進捗管理。今回の答申内容が具体的にどう動いているのか、動かないとすればその理由を提示していただき、こういう風にすれば良いのではないかという形でお返しすることもあるだろう。いずれにせよ、改革を推進していく後押しとして機能させたい。

2点目は、地域からの声を具体的なもの変えていくという役割を想定している。地域の皆様と審議会との対話や現場を回らせていただく中で、「これはおかしいと思うのでこういう風にしてほしい」といった現場の声を受けて、審議会でその改善策を考え、今回の答申の続きのようなものを作り、市にお出ししていくことになるだろう。

2年間の審議会を通して思ったのは、行政側の皆さんも真面目に考えてくださってはいるが、「地域の気持ちは分かるが、具体的にどうすれば良いか分からない」という部分があるようだ。そこを、審議会が知恵を出し合いながら、方策や他自治体の情報提供をさせていただくことで、現場の声を具体的な解決につなげていきたいと思っている。

市長

諮問2については、新たに「郷づくり推進に特化した条例を制定すべき」という結論に加え、新たな条例に期待する内容の提案もいただいている。郷づくりの基軸となる自治会は、その役割の重要性から加入率の低下が危惧されており本市も同様の状況である。他自治体で、自治会への加入を促進するための条例を制定する動きが見られるが、仮に自治会加入の促進を規定する場合、郷づくり推進に特化した条例とは別の条例等で規定すべきか、会長の考えを伺いたい。

会長

個人的な感覚を申し上げますと、自治会加入について義務づけるのは憲法違反であるため、「加入したほうが良いですよ」という理念条例になってくる。それだと、あまり実効性はないのではないかと思います。自治会への加入を義務づけてほしいという意見は多いが、個人的には、あまり筋としては良くないのではないかと感じている。

一方で、自治会加入というのは大事であるため、そこを側面でカバーしていくようなあり方として、「限定的な関わりしろを作っただけあげる」「若い人たちをマッチングしてあげる」「自治会の在り方を見直すお手伝いをする」という形のほうが良いのではないかと。例えば、「自治会活動全般に関わることは難しいが、この部分だけなら中学性にもやってもらえる」という形で、マッチングしてあげるのはいかがか。

また、これは既に実施されているかと思うが、自治会加入率に関して言えば、不動産業者に対して、自治会加入の促進を行ってもらうように定めておくというのも1つの方法である。

しかし、問題視されているのは、自治会に加入していても関わってくれる方がなかなかいないということである。その部分から脱するならば、自治会加入に関する条例よりは、今申し上げたように、関わりしろを作っていくといった形のほうが実効性は高いと思う。

そもそも、地域運営組織や自治協議会と言われるようなものには、2つのイメージがある。1つは、これ自体が事業体というイメージ。もう1つは、プラットフォームのようなイメージ。要するに、色々な団体がそこに乗っかってきて、連携していくというイメージである。多様なあり方があって良いと思うが、事業体として考えてしまうと、活動が自治会的になることが多々

ある。先ほど出てきた、若者たちを応援するとか、つながっていくという視点を、もっと大事にしたほうが良い。自治会が中核的な位置付けにあるということは変わらないが、自治会の延長線上で活動するというイメージから脱却する方向性も認めて良いと思う。

郷づくり推進協議会のあり方は、現在もかなり多様な形になっているが、更に色々な方向性を探求できるようにしたほうが良いのではないかと個人的に思っている。そのため、自治会に焦点を当てた条例にするというのは、そういう筋からしても少し違うのではないか。

市長

郷づくりの取組が始まった当初は、郷づくりは事業体のようなものではなく、多様な人が集うプラットフォームのような自治協議会を目指していたはずだ。しかし、自治会との関わり方も見直さざるを得ない中で、色々悩みながらここまで来たというのはあるだろう。

持続可能なものにするために「郷づくりや自治会には、最低限のことだけお願いしよう」という話が過去に議論されていたが、それでは多様な人材が関わるような自治組織ではなくなってしまう。防災分野と福祉分野を必須事項としているが、それだけでは必ず衰退していくと思う。

答申書の最後に、「郷づくり推進の視点から見ると抽象度が高く実効性が低いため、別途郷づくり推進に特化した条例の制定を求めます」とあるが、これはどういう内容の条例を求められているのか、皆さんの考えを伺いたい。

会長

私のイメージだと、この条例の最大の目的は、地域のバックアップの根拠を作ることである。

先ほど交付金額の枠が決まっているという話が出ていたが、私は地域がこれだけ色々やっているのだから、枠は広げていくべきだと思う。財源は厳しいかもしれないが、優先順位をもっと高めていったほうが良いと思う。その優先順位を上げていくための1つの根拠として、この条例を制定したいという思いがある。

また、行政が責任を持って、郷づくりに寄り添い続けるということである。福津市の多様なコミュニティ活動は、本当に可能性を持った活動をされているという地域のすごさがある。今回の審議会では、地域の声を吸い上げて声を聞くということができた。この仕組みをしっかりと制度化し、日常的にフィードバックし、常に改善し続けていけるようなことができると、不信感が信頼感に変わる。そのための条例であるとも考える。

自治会について誤解がないように申し上げると、自治会は重要である。しかし、事業負担をこれ以上自治会に背負わせるのは良くない。郷づくりのメンバーが自治会メンバーと重なっている場合、余り頑張り過ぎて事業をやってしまうのは良くない。

以前、津屋崎の方で、空き家で演奏会をされたことがあると思う。普通は、騒音等で不満の声が毎回出てくる。しかし、地域の方が周辺の方にきちんと説明し、その代わりに、地域の方々が喜んでくれるような取組をやっている。

くということを見ると、演奏者だけではなく、みんなが幸せになっていく。その際の調整役など、地域の中心としてあり続けるという部分では、自治会は非常に大事である。しかし、この疲弊し続けている中で、サービス提供あるいは事業という意味での活動を自治会に強く求めてしまうのは良くない。基本的には、郷づくりはプラットフォームとして、色々な人をつなぎ合わせながら一緒にやっていくということが大事であるため、そのような仕組みをバックアップしたいと考える。

市長

他の委員の皆さんはどうお考えか。

副会長

郷づくりと自治会の組織には、同じような部分もあれば、異なる部分もある。まちづくりは色々なものと絡み合っているが、今回の審議会では、郷づくりに特化したものも1つあってしかるべきなのではないかという結論に至った。

委員

具体的なことを位置付けて、法的な裏付けがあるというものにするためには、やはり特化したものでないといけませんが、なかなか書ききれないという部分も出てくるであろうという気がしている。本気度を見せることが大切だと思う。

委員

実際どこまで制度の改革に踏み込んでするかというところに本気度が現れるのではないか。地域を回っている中でも、市と郷づくりとの関係性が現場でも整理されておらず、その辺りの関係性がうまく言語化や認識がされていないように感じた。先ほど寄り添うという言葉が出たが、住民自治が何であり、それに対しては市がどういう関わり方をするのかという部分も、しっかりと条例で示していければ良いのではないか。

委員

先ほど会長が述べられていた内容と同じ思いである。

今後、市が郷づくりに特化した内容の条例を制定するのであれば、内容はその際に審議していくものだと思う。

委員

先日、私の所属する自治会の話合いに参加した。今の自治会長がとても改善意識を持たれており、業務の棚卸しをしたいと言われていた。地域の皆さんの意見やアンケートを集約して提案したところ、「業務を変えると、次に自治会長を務める方も大変になるため変えないでほしい」という声上がり、結局変えないことになった。少し大変な時期があっても、そこを越えると良くなるはずだが、そこを越えようとするには、今の自治会長1人では苦しい部分がある。特に長い間自治会に入っておられる方など、変えることに対し

てネガティブな反応も出てくる。これがどの地域でも共通して起こっていることなのであれば、そこに対する何らかの支援が必要なのではないか。

委員

私の地域では、8月頃に新しく東福間12区自治会が設立予定である。この地域は若い世代が多く、話を聞いていると「頑張っているな」というのが分かる。また、市も設立に協力しておられ、実際に市の関わり方を見てみると、やはり市のサポートは必要だろうと感じる。

委員が言われたように、今ある自治会の中でも、変わろうとしているが、なかなか変わることが難しいという自治会はたくさんある。伝統のように自治会を引き継いでいっているというのが今の自治会だと思う。しかし、変わっていった良いはずだ。「自治会はこうでなければいけない」というものはなく、地域の住民が軸で作っていくものである。自治会も変わっていかなければ、持続していかないと思う。その辺りを、市もサポートしていただけると、自治会にもっと若い人も参加することができるのではないかと思う。

市長

地域視察では、各郷づくり協議会の拠点を回られたと思うが、拠点の状況をご覧になって印象に残ったことや、福津市が持つ強みやメリットはどういった点だと思われるか。

委員

地域視察では、各郷づくりの皆さんが本当に頑張っておられるということが印象に残っている。

先日、次年度の自治会長がようやく決まった自治会がある。自治会長を決めるというのは、どこの自治会も悩まれていることだと思う。自治会に対して、市からの支援がもう少し充実していると良いと思う。

地域にどんな人が何人住んでいるか知らないという自治会長が多い。以前は、希望すれば住民名簿を見せてもらっていたが、今は個人情報保護の観点から貸与できない。そのため、「緊急時のみ使用するという目的で署名した自治会長には、名簿を貸与してもらいたい」というのが地域の声である。そういった自治会長の声を、市にはもう少し聞いてもらいたい。

市長

この点こそ行政の本気度が問われるのかもしれない。専門機関の見解では、行政が名簿を自治会長に渡すことは決して悪くないとのことだ。しかし、「訴えられた場合に負けるのは自治体だ」と言われると、行政はしり込みする。

もちろん強制するものではないが、名簿を作って良いといった内容の条例やルール作りはありだと思う。

委員

とにかく速やかに対応していただきたい。答申が出た以上、それに対して市の本気度を見せていただきたいというのが願いである。

委員

今日の答申の後、どういうプロセスで進めるのかということを知りたい。

委員

やはり交流センターで飲酒は不可能なのか。

市長

例えば、若木台には3つ公民館があるが、公民館は市の直営の施設ではなく、地域でルール作りをして自由に運営されている。冷蔵庫を開けたらビールが入っているが、それによって住民同士の争いが始まるということが起こるかもしれない。そういったリスクを、初めからなくすために飲酒は禁止としたりする。

委員

極端な話ではあるが、飲酒を許可すれば「福津市もやるな」となりそうだ。自由度を高めるのであれば、そういったことも検討していただきたい。

委員

個人や1つの組織では対応できないような問題を、いかにプラットフォーム化して取り組んでいくかが重要である。当初は「自治会だけでは対応できないものを郷づくりで作っていく」という段階もあったと思う。しかし、今は郷づくり単位では対応できないような問題がたくさんある。郷づくり同士の連携や人財育成・発掘など、郷づくりでは対応できない、あるいは自治会加入率の問題などの郷づくり単位ですら対応できないような部分は、全市的又は全郷づくりで協力してノウハウを出し合うなど、課題の大きさに応じて柔軟に動くことが、今後更に重要になってくるのだろうと思った。

各郷づくりにヒアリングをしたら、女性が活躍しやすい環境が整って風通しが良い地域、SNS等にチャレンジしている地域、子どもの育成に熱心に取り組んでいる地域など、各郷づくりで課題の先進的な取組のようなものがたくさんあった。そういった取組を郷づくり同士で学び合ったり共有し合ったりするというだけでも、色々とできることがあるのではないかと思った。

また、郷づくりの話を深く聞いていたら、どの地域にもまちづくりの長い蓄積と伝統といったものが根付いているとも感じた。個人的には、各郷づくりを回りながら、先人の方が作ってきたものや郷づくりの伝統をストーリー化し、見える化していくといったことができれば面白いのではないかと思う。市がそういうことをするだけでも、各郷づくりの動きが変わったり、個と全体ができることの選択肢が広がったりするのではないかと思った。

委員

飲酒して良いかどうかは、行政が決めるのではなく「どうぞ地域で決めてください」という姿勢が大事なのではないか。自由にやってくださいと言いながら制約を付けるのではなく、自由にしつつも透明性を高めていくことで、郷づくりで良いか悪いかを判断できるようになる。そして、周りからも

判断ができるように、判断材料をしっかりと見せておけば、かなり裁量を渡しても良いというように変えていくということが大事だろう。

本当にこの答申の中に、かなり思いを込めて丁寧に書いてあるため、それに対して具体的に返していただくということが、郷づくりと行政の信頼関係と行政のやる気が出てくる部分なのではないかと思う。

副会長

2点ある。1点目は、8つの地域の特性は残していただきたいということ。市全体の特性も大事だが、各地域の特性も大事であると感じる。

2点目は、答申後は早めに対応をしていただきたいということ。27ページのイメージ図を見ると、ここまでやらなければいけないというのが示されている。

会長

先ほどの飲酒の話を、行政が決めるというのは難しいことだと思う。そのため、地域から声を上げていただくとやりやすい。結局、行政側も地域側も不安がある。コロナ禍が典型的だが、地域では決め切らないという場合はある。しかし、飲酒に関しては、地域が「自分たちでちゃんとやります」と言えることであり、言われると行政も動かざるを得なくなるはずだ。逆に、「何もかも決めてくれ」と行政に求めれば求めるほど、行政は逃げてしまう。そのため、行政を逃さないためには、地域が「自分たちが責任を持つ」という心意気を出さなければいけないと思う。行政には、地域側のそういったご意見も含めて考えていただきたい。

併せて2点お願いをしたい。1点目は、これだけ頑張っておられる地域の活動が、もっと知られるようになってほしいということ。例えば、私の大学のゼミ生が郷づくりに行き、取材させていただいてまとめたものを地域にお返しする、といったことをやりたいが、どこに相談したら良いか分からない。大学側もやりたいことはあるが、「どうしたら良いか分からない」「相談窓口が分からない」という部分があるため、大学と地域がつながりやすい工夫をしていただきたい。そうすると、地域の活動が見えるようになり、「こんな風に学生たちは見てくれているのだな」という勇気や次のエネルギーにつながってくる。

2点目は、体制を整備するという。今後、実行に移していくということだが、その際に大事なことは体制の整備である。今回、事務局の皆さんは本当に頑張ってくくださった。しかし、今後この答申の内容を実現しようとするならば、かなり大変なことになるため、ぜひ職員の人員拡充と委託料などの予算の確保を考えていただきたい。場合によっては、キッカケラボの方も人員拡充が必要かもしれない。やはり、なすべきことが多い分、体制整備をしっかりとさせていただかなければ回らないため、そこはぜひお願いしたい。

市長

行政の地域コミュニティの窓口は地域コミュニティ課になるが、宮司郷づくりは、学生が直接問い合わせをされて、参画されているという例もある。地域によっては、独自に学生を受け入れている郷づくりもある。

特に大学には、福津市を地域自治についての研究の対象やフィールドワークにどんどん使っていただきたい。決して仕事を振るという意味ではなく、学生の方の研究の材料や人生の体験として、自由に色々を見て感じていただきたいと思っている。郷づくりが知られるようになるための体制作りというのは、改めて必要ではないかと捉えている。

未来共創センターを作った目的の1つとして、あらゆる分野で人財や担い手がいなくなっていたり、人財が循環していなかったりしているため、人と地域がつながる新たなきっかけを作れたらという意図がある。キッカケラボには、引き続き地域と人財をつなぐきっかけ作りを担っていただきたいと思う。

この審議会は、今後も第三者機関として位置づけていきたいと思っている。私が市長になった8年前に、市が助言を求めたり、提言をいただいたりするシンクタンクを作りたいと所信表明をしている。この共働推進会議が、色々な意味でシンクタンクのようになっていたらと思っている。特に今1番重要で、乗り越えていかなければいけないことも多い郷づくり制度であるため、ぜひ引き続き皆さんと関わりを持たせていただけたらと思っている。

最後に、事務局から今後の進め方について説明をお願いします。

事務局

まずは、令和6年6月を目途に、地域コミュニティ課で実行プランの策定を予定している。実行プラン策定後若しくは並行して、令和6年度の夏ごろに改めて共働推進会議を立ち上げる予定である。策定した実行プランを1回目の審議会で説明させていただき、ご意見等いただいた上で令和6年度から実行できるプランは、実行していきたいと考えている。

令和6年度の年度末にもう一度共働推進会議を招集させていただき、令和6年度の状況報告と委員の皆さんからのチェックをしていただく予定である。共働推進会議は常設を予定しているため、今後は、毎年度このような形のルーティーンで続けていきたいと考えている。

また、郷づくりに特化した条例の制定をどのようにするのかということについては、令和6年度中に検討していきながら、早ければ令和7年度から、令和6年度の検討結果に基づいて何らかの取組を始動したいと考えている。

しかし、職員体制も含め、どうしても今のマンパワーではできない部分もあると思うため、状況を見ながら進めていくということになるだろう。令和6年度は、その辺りの調整も兼ねて取り組んでいきたいと現時点では思っている。

市長

事務局から説明があった通り、令和6年度も共働推進会議を招集させていただきたい。令和6年6月ごろに向けて、行政で実行プランをもませていただき、また皆さんにお示しさせていただこうと思う。

事務局

以上で、本日の会議は終了とする。

